

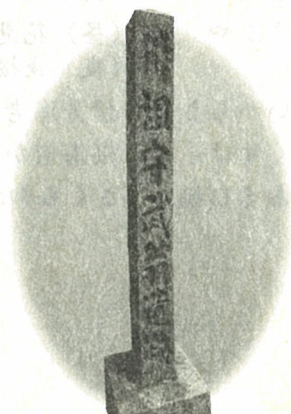


季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

〜第一二八号〜

清明 せいめい

四月四日



## 伊勢論語

おかげ横丁の北側、魚春さんの横から伸びる狭い道は、「長の世古」と呼ばれます。この名は、室町末期、内宮の一禰宜、長官になった荒木田守武の私邸があったことから。守武は、幼少の頃から連歌をよくし、約束事の多い連歌から俳諧を独立させたため、俳諧の祖という意味の「俳祖」といわれます。邸宅跡には標柱が立っているだけです、その功績は多大なものがあります。

そのひとつに、世の中という言葉を入れた百首を詠んだ『世中百首』があります。人の道を説いたことから、伊勢論語ともいわれ、江戸時代にはずい分と読まれたようです。

原文ではとても難しいのですが、五十鈴塾の矢野憲一塾長が現代風に解説したものを読んでみました。守武が五三歳、旧暦の九月四日の庚申さんの夜に一気に詠んだので、矢野塾長もそれにならって、一晩で解説を書いたそうです。読む方は一時間もあれば大丈夫です。

世中の人を悪しとも思ふなよ  
我だによくば人もよからん

(人を始めから悪人と決めず、自分が正しければ人も善くなることだ)

人をわが心のごとく思ひなば  
相違する事あらん世中

(人も自分と同じ気持ちだと思つと、あてがはずれるよ)

物書きの端くれとして、厳しい一首もありました。  
世中に書くべきものは書かずして  
ことをかくなり恥をかくなり

(書かなければならないことを書かず、世の人は事を欠いたり、恥をかいたりしている)

書くべきものを見極めていきたいと自省する次第です。

文

千種清美

